



聚樂秘藏談

十七

^ 13  
3326  
17



門へ13  
3326  
117

録

七卷

法言

年

茶儀榮

聖樂秘藏卷之拾七



目錄

一石門書院

伴氏仲母の誠の忠びの事

大正十年八月廿九日  
贈  
本大學出版部

石川

一口

梅林

舎 齋

二行目

正藏

石川家傳不傳の巻

聖樂秘藏法卷之拾七

石川家傳不傳の巻

伴氏法母の蔵書

初<sup>う</sup>之<sup>し</sup>行<sup>ぎやう</sup>書<sup>しよ</sup>下<sup>か</sup>ら<sup>り</sup>上<sup>かみ</sup>の<sup>うへ</sup>書<sup>しよ</sup>の<sup>の</sup>好<sup>こう</sup>解<sup>げん</sup>と<sup>し</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>の<sup>の</sup>場<sup>ば</sup>あ<sup>ら</sup>と<sup>し</sup>感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>成<sup>せい</sup>就<sup>じゆ</sup>なる<sup>なり</sup>也<sup>なり</sup>

吾び渡海し合戦しおとらるる也  
其の母と侍の軍意を以て戦  
ぬきんあしりかたなり又さ  
たふともら集しり瓜を春年の代  
たりしや安んじりて安んじりて  
平生軍意の淵源しりて將たるもの  
たふひ家又匹又なりしりてたふひ

以てあまのしり軍意を以てあま  
も今も福を以て戦戦を以てあま  
一方は神の方場しりて柳と  
軍意を以てあまのしり静置しりて  
生敵を以て戦戦を以てあま  
りてあまのしり静置しりて  
静置しりてあまのしり静置しりて

孔明が術を以て治すに空  
匹夫の術を以て治すに空  
なまの術を以て治すに空  
いふに事なり成命となぐら軍  
を以て治すに空  
其れ志なり其れ術なり其れ軍なり  
なまの術を以て治すに空  
いふに事なり成命となぐら軍  
を以て治すに空  
其れ志なり其れ術なり其れ軍なり  
なまの術を以て治すに空  
いふに事なり成命となぐら軍  
を以て治すに空  
其れ志なり其れ術なり其れ軍なり

致<sup>きた</sup>の<sup>し</sup>所<sup>ところ</sup>も<sup>も</sup>ほ<sup>ほ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>ひ<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>る<sup>る</sup>業<sup>わざ</sup>が  
し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>戦<sup>いくさ</sup>号<sup>ごう</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>  
傳<sup>つた</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
此<sup>こゝ</sup>書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>別<sup>べつ</sup>行<sup>ぎょう</sup>長<sup>ちやう</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
早<sup>はや</sup>速<sup>すく</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
自<sup>みづか</sup>便<sup>べん</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>一<sup>いつ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
業<sup>わざ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
一<sup>いつ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
業<sup>わざ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
業<sup>わざ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
業<sup>わざ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

身みとと縁縁如如好好きき遊遊遊遊身身

容容意意のの用用一一福福推推ひひのの音音音音

行行長長焦焦らら所所野野一一倍倍也也人人とと一一連連

素素ららのの如如好好おお向向ひひ契契のの境境一一ととぬ

くくとと容容意意一一周周のの身身伴伴のの茶茶をを

多多くくのの如如好好おおららのの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

一一福福のの身身伴伴のの茶茶をを人人ののをを

醫師れどあへて... 又五び船解の... 此舟下... とも... 此舟を...

こぼる... 留の... け... け... け... け... け... け... け... け... け...



山島不登... 松本五郎重久

云... 山成者... 松平忠

朝... 朝拜西と海

山... 山西行長

減... 減毛の海を紀元のお昔傳より

毛... 毛利宗意... 医師

所... 所よりが... 望海と意せ

切... 切支丹の意を造る... 了

湯... 湯原津の造る... 是は如好

由村前野評儀の

安田孝人... の事

吾... 吾は... 大園... 山

山... 山... 山

山... 山... 山







叶の余の海ありも  
すまじと云ふ

号のほほせり  
あつたがらう  
只今

よして  
あつたがらう  
君れ身

しらん  
あつたがらう  
お多の申中と

ちあつた  
あつたがらう  
君れ身

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

申の  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう

あつた  
あつたがらう  
あつたがらう



東海の人を頼りて入るべき事な

たれかあまのうのうを

はなはちのうのうを

うのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

東海の人を頼りて入るべき事な

たれかあまのうのうを

はなはちのうのうを

うのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

はなはちのうのうを

少村と果はくさ城一何年一

沙市新中並一ま一は好い所と

ち事より一と海を念ぐもらうぞ

秀原と市を好くは春の香中伴

しも流るゝ水が為儀と別な一とを

加えしお物なす秀柳の室の事

かれが古園北野と海一の昔と

母を流しのお母ははるまじ

ろひ左園とをまゝと権をさ

くもの山をへり外供之春候

せし知古園北野とを西園殿

和を習う一まのまをせぬ

るもてをなれりともせし所候

お名をとりしるび給ひのまを





乃ら名仁我を以て忠孝と守り  
たりて市井居士仁徳を慕ひて  
山中の海をまじりて其所を  
探して源をたもとす  
と成るは由り重層の岩を  
めぐりて流るる大なる川を  
いへばとめあきてるを海に  
いへば

しるくは成おるを  
猶危切やこれ類の信より  
毒をば世にのりて  
を周るる行方とて  
門下一ありて  
まのたれ徳人の  
末代とれ



長安が是也ながあんのこゝ 望らるるも函且のぞまらるるもはふ

の保くは信くはのたもくはしんくは 信くは信くはしんくはしんくは

成まればはなりまればは 成まればはなりまればは

上國と稱せはかみくにとよめば 上國と稱せはかみくにとよめば

なまは△なまは 性者の害を成△じやうぢやのがいはをなり

下宿の和等とげしゆくわどうと 下宿の和等とげしゆくわどうと

ふくろははふくろはは 信くは信くはしんくはしんくは

の品くはとのひんくはと 品くはとひんくはと

あまの業度とあまのわざと あまの業度とあまのわざと

あまの業度の是とあまのわざのこゝろ あまの業度の是とあまのわざのこゝろ

君長久れときみながくは 君長久れときみながくは

取手首とりてのくび 取手首とりてのくび

道の端とちのはた 道の端とちのはた

以て成りてはもつてなりては 以て成りてはもつてなりては

長久の基ひし 今も之は家の魂

美人の心 左衛門の心 花の心

中納言の心 相海 心 心 心

左衛門の心 心 心 心 心

御下は是らして 若れ 若れ 若れ

系 系 系 系 系

御下は是らして 定り 定り 定り

この心 心 心 心 心

心 心 心 心 心

心 心 心 心 心

心 心 心 心 心

心 心 心 心 心

心 心 心 心 心

心 心 心 心 心

あはれと信人の中ありて申すは  
君と結うしひる人多うと記さる  
左圓と極めりやれと極めりや  
君殿よ徳ゆふなれ左圓と眼の  
新しと得てあつたの智南上人は君に侍  
らざりし時と極めりやに徳ゆふや  
しやゆふと極めりや中ありて

姫と結うしひる人多うと記さる  
左圓と極めりやれと極めりや  
君殿よ徳ゆふなれ左圓と眼の  
新しと得てあつたの智南上人は君に侍  
らざりし時と極めりやに徳ゆふや  
しやゆふと極めりや中ありて

あわじ  
ろくろぶくしと譯者まびち國を建

とくそんれ兼もつりて速く國を徵と

つて海をめぐりて元の中流をよ知れ

ぬ心 天子を奉養とて新にも勅定

つて操りてあまの國にのほつてよま

信人いふよ中操りて勅定を肯れ

ぬあまの國にのほつてよま信人

海をめぐりてあまの國にのほつて

あまの國にのほつてあまの國に

の國にのほつてあまの國に

ぬあまの國にのほつてあまの國

あまの國にのほつてあまの國

一生を送りてあまの國にのほつ

あまの國にのほつてあまの國

あまの國にのほつてあまの國

あまの國にのほつてあまの國



104  
名家入道 成  
此知摩 賢  
世所 詞  
但

西樂秘藏抄卷之拾七

法如何 亦に 桑ら ぬら  
少 賢 賢  
一切 賢  
賢



